

千字文の冒険 —和漢比較文学研究における文字オントロジーの応用研究—

相田満^{†1} 石井行雄^{†2}

日本に最初に渡来したといわれる漢籍の一つ、『千字文』は、それ自身が概念知識体系としても受容されてきた。本発表では、文字セットとしての『千字文』を例に、その電子テキストを利用して日本古典籍への受容・影響を調査するための基礎調査と検証を試みる。

The adventure about Thousand Character Classic

MITSURU AIDA^{†1} YUKIO ISHII^{†2}

—An applied study of the Character Ontology
in the study of the Japanese and Chinese comparative literature.—

A "Thousand Character Classic" is one of the Chinese books first introduced into Japan. As for this text, itself is received also as a ontology. In this presentation, by making and using the machine-readable text of "Thousand Character Classic", and I would like to verify how the character set was accepted in the classic of Japan..

1. はじめに

応神天皇(270~310)の時代、百済王の使者として漢学者の阿直岐が来て、天皇はこれを留め置いて太子の菟道稚郎子皇子(後に仁徳帝に皇位を譲るために自殺)の師とした。その翌年、また王仁を呼び寄せて師としたが、この時王仁が持参した『論語』・『千字文』などが献上された。

王仁の名は『日本書紀』や『古語拾遺』に見えて諸の典籍を献上したとあるが、『論語』『千字文』などの具体的な書名は、『古事記』中巻・応神天皇の条に現れる。すなわち、又百済国に、「若し賢しき人有らば貢上れ。」と科せ賜ひき。故、命を受けて貢上れる人、名は和邇吉師。即ち論語十卷、千字文一卷、併せて十一卷を是の人に付けて即ち貢進りき。〈此の和邇吉師は、文首等が祖。〉[又科賜百済国若有賢人者貢上。故受命以貢上人名和邇吉師即論語十卷千字文一卷并十一卷付是人即貢進〈此和邇吉師者文首等祖〉] [a]

とある通りである。『日本書紀』『古事記』の記事、いずれにしても、これから日本にも文教が興隆・浸透したといい、そこに記される2書、特に『千字文』の名は、奈良朝官人による手習いの跡が木簡に残されているように、古代、とりわけ上代の書記文化において、深甚な影響を及ぼしていることは疑いない。

『千字文』は重複のない千字の漢字で構成された四言詩で、漢字文化圏の諸国で広く用いられ、日本でも明治半ば

まで知識教養の根幹を担っていた。ところが、『千字文』といわれるものの中にも幾つか種類があり、891年(寛平3)ころ成立した日本最古の書目録、藤原佐世撰『日本国見在書目』十小説家を閲しても、9世紀ごろまでに日本に移入したと伝えられるもののみでも数種類を数える。

中国で作成された『千字文』も約25種撰述されるといわれるが[木村正辞, 1893]、しかし、日本においては数種を除いておおかた行われなかった。最も流布した『千字文』は梁の武帝(464-549, 在位 502-549)が周興嗣に命じて次韻させたといわれる6世紀に成立した『千字文』である。

したがって、3世紀の応神16年に伝来したといわれるものは魏の鍾繇(151-230)が作り、王羲之が書いたとされる『古千字文』ともいわれた。六世紀後半の人で日本においても受容された李暹注の序文にも鍾繇を「千字文」原作者とする説が記され、中国でも宋代には相当広まっていたのである[b]。

明の王肯堂(16世紀の人)の『鬱岡齋墨妙』(巻四)という法帖に刻される鍾繇真跡をめぐっては、書写者の真贋はさておき、はたしてそれが鍾繇作の『千字文』のものかについても議論が分かれるところである。尾形裕康はこれを『古千字文』と呼び、全文と異同を紹介するが[尾形裕康, 1978]、その文句は、周興嗣次韻と題される一般的な『千字文』が、

天地玄黄 宇宙洪荒
寒来暑往 秋收冬藏

から始まるのに対して、『古千字文』は、

二儀日月 雲露嚴霜

†1 国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature

†2 北海道教育大学釧路校
Hokkaido University of Education KUSHIRO Campus

a) 本文は『兼永本古事記・出雲国風土記抄[CD-ROM]』(国文学研究資料館データベース古典コレクション)を使用した。

b) 『宋史』李至伝、^{ぶんえい}積文瑩『玉壺清話』、王応麟『玉海』巻四五、敦煌本『雜抄』など。

夫貞婦絮 君聖臣良

と始まるように、字句のならばは通行の周興嗣『千字文』と異なるものの、使用される文字の概は次の点で一致する。すなわち、

- ① 同一の4字句 5句 20字
- ② 『古千字文』自体における重複字 8箇所 16字
- ③ 四字句中の3字が同一するもの 1箇所
- ④ 四字句中三字が順序不同で同一文字のもの 1箇所
- ⑤ 共通する同一の二字句 96句 192字
- ⑥ 四字句中2字が顛倒しているもの 2句 8字
- ⑦ 2文字の上下が顛倒しているもの 24字

上記の理由により、『千字文』『古千字文』双方に共通している文字の総計は250字にのぼる[同]。

ただし、『古千字文』は、周興嗣の千字文に比べて、その流布状況は中国においても日本においても極めて狭かった。確かに、正倉院にかつて在庫した天平勝宝八年(756)六月二十一日条の王羲之千字文搨書や、伝教大師(最澄、767-822)が唐から将来した書目「御経蔵宝物教目録(大師)」に「古千字文一卷」などの記載があることから、『古千字文』の存在も否定できない。しかし、畢竟、その渡来から今日まで、多数の『千字文』が書写・刊行されてきたものの、奈良時代に残存する木簡をはじめとして、日本に流布した『千字文』は、周興嗣のものが圧倒的であったことを考えあわせると、まず、周興嗣次韻『千字文』を機械可読テキストによる分析対象として可能な状態として、それを指標として、鐘繇の『古千字文』に及ばせて考察することが基本的手順と考えられよう。

そこで、本稿ではまず、周興嗣次韻『千字文』を分析の俎上に載せるための手続きを検証し、そのテキストを使用して『風土記』との比較、さらに『古事記』との比較に及ぶ。

2. 周興嗣『千字文』は何字あるか

周興嗣次韻の『千字文』の成立には伝説がある。すなわち、梁の武帝が王子たちに書を習わせるため、晋の王羲之(321-379?)の筆跡中から、重複のない千字の模本を作らせたが、次第不順の一字ずつの紙片であった。そこで武帝は周興嗣(470?-521)に、これを韻文に仕立てることを命じた。周興嗣は一晚で整然たる四言詩を作り上げたが、その苦心のために総白髪になってしまったという。

その際、周興嗣がは、魏の鐘繇(〜二三〇)が作り、王羲之が書いたとされる『古千字文』に対して、同じ韻字を同じ順序に用いて詩を作る次韻を以て、新たな『千字文』を作り上げたとも伝えられるが、それが先述したとおり『古千字文』と概が一致する理由である。

周興嗣次韻の『千字文』が、重複のない千字の漢字で構成されたものとはいえ、そこに用いられる字は、現在通行の字体とは異なるが、現代日本の規格漢字で入力可能な文字の様態は以下の通りである。

常用漢字で入力不可能な文字……208字

JIS X 208 で入力不可能な文字……14字

JIS X208 で入力不可能な文字が14字というのは、いくら現代通行の文字を反映させることを旨とする文字セットが規格文字の意義とはいえ、『千字文』が長い間使われてきた歴史を考えると、比較的少ないと判断できるかもしれない。そうした事情を反映してか、1990年に制定されたJIS X 0212や、それを反映させたJIS X 0213:2000では、いずれも入力可能な文字となった。

ちなみに、JIS X 208 で入力不可能だった文字は次表の通りである。

順番	UCS版	JIS水準	UCS-CODE
164	絮	3	7D5C
424	涇	3	6D87
529	礪	4	78FB
580	號	3	8662
644	邈	3	9088
749	感	4	617C
776	飜	4	98BB
778	鷗	4	9D7E
794	輪	3	8F36
833	紉	3	7D08
839	焯	3	7152
874	類	3	9859
917	嵇	3	5D46
954	璣	3	74A3

図1 JIS X 208 入力不可能字

ところが、千年以上にもわたって漢字文化を伝承する過程で、『千字文』収載字には異体字、さらに皇帝・王などの尊貴な人の実名を生存中は呼ぶことをはばかって、代替するために使用される避諱字も発生するようになってきている[小池和夫, 2002]。

たとえば、周興嗣『千字文』の第二十六句目「周発殷湯」には、

- 101 周
- 102 発…發(異体字)
- 103 殷…商(避諱)
- 104 湯

第102番目の「発」字は、いわゆる新旧の異体字関係が発生し、第103番目の「殷」字には「商」字を避諱字として使用された本文、すなわち「周發商湯」を持つ本文も流布している。

宋・呉枋『宜齋野乘』には「千字文字重複」として次の記事を収める[宋・呉枋]。

千字文有女慕清潔又有紉扇圓潔重兩潔字今宜改清潔為清貞庶不重複

このような現象は、早くから気づかれていたらしい。しかし、結局、現行の日本における機械可読文字の環境では、周興嗣次韻の『千字文』は、異体字・避諱字の派生によって1,381字の文字セットをさらに検討対象とすることになっているのである。しかも、その内32字には『千字文』内に重複が存在することとなり、そうした異体字・重複字の統合と併せて、周興嗣『千字文』漢字を指標とする検討を進めるためには、異説とその異体字と併せて254字に対して発生していることとなる。

順番	JIS X208	異説	備考	異体字一覧
60	奈	柰	元来区別無し	柰
91	讓	遜	避諱(通用)	讓
530	溪			溪谿 磎嶮
547	匡	輔	避諱による	匡
619	恒	秦	避諱による(通用)	恆
643	綿		「綿」はきぬわた 「棉」はきわた	絲
718	皐	皐	「皐」は智永本など、「皐(エキ・ヤク)」は別字	皐
835	円	員	通用字	圓
951	朗	晃	避諱	朧

図2 機械可読文字による『千字文』の留意点(一部)

3. 『風土記』に見る『千字文』漢字

こうした事情を踏まえて、『風土記』中に『千字文』に使用される字がどれだけ出現するかを検証してみよう。

ここでいう『風土記』は、日本の奈良時代に地方の文化風土や地勢等を国ごとに記録編纂して、天皇に献上させた書をさす狭義の典籍で、正式名称ではなく、ほかの風土記と区別して「古風土記」ともいう。

奈良時代初期の官撰の地誌で、元明天皇の詔により各令制国の国庁が編纂し、主に漢文体で書かれた。

その成立は、『続日本紀』巻6の和銅6年(713)5月甲子条が『風土記』編纂の官命であるとされている。すなわち、その条には次のようにある。

五月甲子。制すらく。畿内と七道との諸国の郡・郷の名は好き字を着けしむ。その郡の内に生れる、銀・銅・彩色・草・木・禽・獸・魚・虫・等の物は、具に色目を録し、土地の沃瘠、山川原野の名号の所由、また古老の相ひ伝ふる旧聞・異事は、史籍に載して言上せしむ。(五月甲子。制。畿内七道諸国郡郷名着好字。其郡内所生。銀銅彩色草木禽獸魚虫等物。具録色目。及土地沃瘠。山川原野名号所由。又古老相伝旧聞異事。載于史籍亦宜言上。)

ただし、この時点では風土記という名称は用いられてお

らず、『播磨国風土記』はもっとも早く、郷里制が施行された霊龜2年(716)以前の進上と考えられ、ついで『常陸国風土記』が、石城国が成立した養老2年(710)以前の進上と推測される。『出雲国風土記』は天平5年(733)2月の勘造、豊後・肥前の『西海道風土記』は、郷里制施行期の天平11年(739)以前の成立であろうと考えられている。

記すべき内容として、

1. 郡郷の名(好字を用いて)
2. 産物
3. 土地の肥沃の状態
4. 地名の起源
5. 伝えられている旧聞異事

が挙げられる。『出雲国風土記』がほぼ完本、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』が一部欠損して残される。その他の国の風土記も存在したと考えられているが、現在は後世の書物に逸文として引用された一部が残るのみである。ただし逸文とされるものの中にも本当に奈良時代の風土記の記述であるか疑問が持たれているものも存在する。

『千字文』のテキストは、書の手本として流布してもいたため、字体の変化がどれだけ出現したかを比較的把握しやすいが、『風土記』の場合は、転写が重ねられたものしか存在せず、原本・字体の変化をさかのぼって確認すること自体、もとより不可能である。

その意味で、『千字文』所収の各字に対して、異体字類を含んだ文字セットを基礎資料として用字の比較を行うことは、字形の揺れや字体のゆらぎを含む文字も、使用された可能性のあるものとして、比較的漏れのない調査方法となる。

今回検証に用いたものは、岩波古典大系を電子化した古典本文データベースである。検証対象となるものは、『風土記』の康熙字典体を採用して書かれた原文表記の部分であるが、事前に常用漢字内の字についてはすべてそれに改め、概念上に存在する漢字の「字体」自体を比較することとした。

その方法を採用しても異体字の揺れは吸収できることは先述の通りであるが、もとより、『千字文』を1,000字の文字セットを有するものとして認定することも不可能である。しかし、字形にまでこだわった完全な比較方法には限界がある以上、致し方のない所だろう。

[図3]に、各『風土記』に見える周興嗣次韻による『千字文』との一致率を比較した表を掲げる。

この結果を見ると、各『風土記』には最大一〇%程度の使用字の差異があることがわかる。詳細な分析のためには、さらに補証を積み重ねることが必要だが、その一部を採り上げ、『千字文』と共通する字に 線を引き、地名を□で囲い、それぞれ依って立つ漢字知識の原拠が分かるように示したところ[図4]の通りとなった。こうした手法を他の作品に及ぼして、知識基盤を観点から文化史を読み解くことも可能である

が、さらに後考を期すためにも、次に『古事記』に現れる『千字文』漢字の観点で分析を試みたい。

風土記名	一致字数	全字数	一致率	一致字種	全字種	一致率
常陸国	4,981	7,483	67%	556	1,272	44%
出雲国	10,554	17,299	61%	482	1,154	42%
播磨国	8,177	11,759	70%	499	1,100	45%
豊後国	1,548	2,306	67%	289	567	51%
肥前国	2,943	4,340	68%	413	839	49%
総計	28,203	43,187		2,239	4,932	
平均	5,641	8,637	66%	448	986	46%

図3 『風土記』中の『千字文』漢字

国之大体△首震尾坤△東南山△西北属海△東西一百卅九
 里一百九步△南北一百八十三里一百七十三步
 (一百步)
 (七十三里卅二步)
 (得而難可誤)
 老△細思枝葉△裁定詞源△亦△山野浜浦△処△鳥獸之棲
 △魚
 貝海菜之類△良繁△悉不陳△然不獲止△粗莠梗概△以
成
 記趣
 所以号国者△因困△困困△困困△困困△詔△八雲立詔之△故云八
雲立
困困

図4 『出雲風土記』中の『千字文』漢字

4. 『古事記』に見る『千字文』漢字

次に、『古事記』について分析を試みたい。『古事記』のテキストを入力するに際しては、存外にJIS X 213でもカバーできない文字が多かったが、結果的には、『古事記』の方が、『風土記』よりも分かりやすい例を示すことができた。

テキストの底本には兼永本を翻刻した『兼永本古事記・出雲国風土記抄[CD-ROM]』(国文学研究資料館データベース古典コレクション)を使用した。分析のために外字を規格文字に改めるに際して、たとえば以下のように改めている。

- 【討／虫】→蝨
- 【木＋案】→椽
- 【(面／旦)＋鳥】→鶻
- 【穴／倉】×→; 【穴／君】→窹
- 【帝＋鳥】→鶻(8個あり)／岩波体系■【第＋鳥】(書紀には見えない)
- 【艸／騰】→藤(仏字)→藤
- 【木＋音＋戈】→楫
- { (基－土)＋■ } →碁

- { (與－八)／(夕＋七) } →苑
- 【木＋宿】→楡
- 【虫＋(口／又)】→蝸
- 【(西／土)＋鳥】→鶻→鶻
- 【口／又】→囟→目
- 【木＋向】→柯

『古事記』は奈良時代の歴史書で、上中下の三巻よりなる。天武朝に企画され、天武天皇の命で稗田阿礼が誦習(文字化された資料の読み方を習い覚えること)した帝紀(天皇の系譜・皇位継承の次第を柱とする天皇記)と旧辞(古伝承)を、元明天皇の命を受けた太安万侶が撰録したものである。『風土記』編纂の詔が出された前年の和銅5年(712)に成立した。

巻頭には安万侶撰進の上表文を載せられ、上巻は国土形成の起源と王権の由来を神代の事柄として記し、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの国家の形成史・皇位継承の経緯を系譜とが物語によって記される。

『古事記』の研究が本格的に行われるようになったのは近世に入ってからからで、その中心は本居宣長の『古事記伝』といっても過言ではない。近世の国学は宣長が35年の歳月と彼の学問を傾け尽くしたといっても過言ではない名著『古事記伝』44巻を著わし、その影響は近世国学の精神的支柱として絶大なものとなった。

その内、仲哀天皇の記事を、前項と同様の方法で分析し、その結果を示すと、以下ようになる。

其太后息長帶日賣命者當時歸神。故天皇坐筑紫之訶
志比宮將擊熊曾國之時天皇控御琴而建内宿祢大臣居
 於沙庭請神之命。於是太后歸神言教覺詔者、西方有國。
金銀為本日本之炎耀、種種珍寶、多在其國吾今歸賜其國。
尔天皇答白登高地見西方者不見國土

二重傍線 の付されていない箇所が、非『千字文』語となる。その依る所で目を引くのが「炎耀、種種」の語である。これらの語句は、『千字文』語彙にもある「珍寶」と併せて、仏教語彙としても目にする機会が多いので、試みに、SATを利用して、その出典を調べてみると、「種種」で55850件、「種種珍寶」でも215件という多数の語句が出るが、「炎耀、種種」の語を持つものについて、1例あることが分かる。すなわち、

佛説無量壽經 (No. 0360) [0267a21](#) - [0267b18](#): 無與等者日月摩尼珠光炎耀皆悉隱蔽猶如聚墨如來容顏超世無倫正覺大音響流十方戒聞精進三昧智慧威德無侶殊勝希有

とある結果を得た。『佛説無量壽經』は、大藏経では宝積部・涅槃部に収められる康僧鎧の漢訳になるもので、浄土教典として読まれることを特色とする。

このことは仏教色の排除につとめた本居宣長の『古事記』研究の埒外に存する事象であるが、1979年(昭和54年)1

月23日、奈良県奈良市此瀬町の茶畑から安万侶の墓が発見され、火葬された骨や真珠が納められた木櫃と共に墓誌が出土したことから、太安万侶が仏教に深い尊崇意識を抱いていて、これが『古事記』の文字表記に影響したと考えることは、極めて蓋然性が高いといえよう。

5. おわりに—より詳細な分析に向けて—

以上、周興嗣次韻の『千字文』を指標として、日本の古代文献中に見える非『千字文字』を抽出することにより、その文献の特徴を洗い出すための基礎的取り組みを紹介した。

文字処理については、機械可読文字に改めるテキスト形成に多くの時間を費やした関係上、シミュレート作業に十分な時間がかけられなかった傷みはあったが、それでも本作業を通じての意義が見えてきたように思う。

特に、文字表記の上では、地名・人名に使用される字の位相は、『千字文』などの古典テキストを出典とする世界とは出所が異なっており、テキスト分析を行うに際して、それらを除外すると、また異なった叙述の源泉が見えてくるものと予想される。

謝辞

本研究は、基盤研究(A)「和漢古典学のオントロジーの高度・具現化」(研究代表者：相田満)による研究成果の一部である。

参考文献

- 小池和夫.(2002). 千字文逍遙. 著: 小宮山博史・府川充男・小池和夫, 真性活字中毒者読本. 柏書店.
 宋・呉枋. 宜齋野乘. 著: 顧氏文房小説第3冊 (ページ: 6ウ).
 尾形裕康.(1978). 近代日本における千字文型教科書の研究. 早稲田大学出版部.
 木村正辞.(1893). 百濟貢獻の千字文. 東京学士院雑誌.

附：参考資料(千字文異体字一覧)

順番	見出字	異説	備考	異体字
11	盈			盈
18	来			來徠
20	往			往
21	秋			穉穉
22	収			收
24	蔵			藏匪
26	余			餘

28	歳			𠂔
32	陽			阳陝
39	為			爲
48	岡			崗
49	劍			劍劔劔 劔劔
50	号			號
54	称			稱稱
56	光			芡光
58	珍			玼
60	奈	柰	元来区别無し	柰
66	鹹			鹹
70	潜			潜潜
73	竜			龍龕
75	火			伙
81	始			𠂔𠂔
91	讓	遜	避諱(通用)	讓
92	国			囯國囯
99	伐			𠂔𠂔
102	発			發
108	道			循循導
109	垂			垂
114	育			毓
120	羌			羗
122	邇			迤
123	壹			壹
124	体			躰體體 躰
125	率			𠂔
127	帰			歸皈
136	場			場
143	万			萬
145	蓋			盖蓋
148	髪			髮
149	四			𠂔
156	養			𠂔
165	男			𠂔
166	効			效
184	長			長𠂔
185	信			訃
189	器			噐
195	糸			絲
198	讚			讚
204	賢			賢
207	作			做
208	聖			𠂔

209	德		惠
219	伝		傳
220	声		聲
221	虚		虛
224	聴		聽
226	因		囧
227	悪		惡
229	福		富
231	善		善
236	宝		寶寶塞
238	陰		阴陰食
239	是		是
243	事		事吏
246	厳		嚴
247	与		與
250	当		當
255	尽		盡
265	似		似
270	松		恣案松
277	淵		淵淵困
278	澄		澄
280	映		映
284	思		思
286	辞		辭辭辭
293	慎		慎
295	宜		宜宜
297	栄		榮
305	学		學孝敦
307	登		登
309	撰		撰
310	職		職職
311	従		从從
317	去		去
320	詠		咏
321	楽		樂
324	賤		賤
325	礼		禮
329	上		上
330	和		和
331	下		下
334	唱		唱
336	随		隨
349	猶		猶
351	比		比
352	児		兒
354	懐		懷襄

358	気		氣炁
371	隠		隱L
381	顛		顛
386	静		靜
389	心		心
393	守		守
394	真		真
396	満		滿
404	操		操
411	華		華
412	夏		夏
415	二		二
416	京		京
419	面		面
423	拠		據
428	鬱		鬱
429	楼		樓
430	観		觀
433	図		圖
434	写		寫寫
436	獣		獸
437	画		畫
440	靈		靈靈灵
442	舍		舍
444	啓		啓
446	帳		帳
447	対		對
453	鼓		鼓
458	階		階
461	弁		辨辦辦 辯
462	転		轉
464	星		星
467	広		廣
470	達		達
472	明		明
479	群		羣
480	英		英
482	稿		藁藁
484	隸		隸
485	漆		漆
488	経		經
491	将		將
494	侠		俠
500	県		縣
509	駆		駟驅毆

513	世			世
514	祿			祿
516	富			富
520	輕			輕
521	策			策
524	實			實
530	溪			溪谿磎 嶼
534	時			峯
544	營			營
547	匡	輔	避諱による	匡
549	濟			濟
554	回			回
556	惠			惠
565	多			多
568	寧			寧
569	晋			晋
572	霸			霸灞
577	假			假
581	踐			踐
583	会			會
588	法			法 濃金
599	最			最
606	誉			譽
612	跡			蹟迹
617	岳			嶽
619	恒	秦	避諱による(通用)	恆
621	禪			禪
625	雁			鴈鴈
629	鷄			鷄雞
638	野			埜埜
641	曠			曠
643	綿		「綿」はきぬわた 「棉」はきわた	綿
645	巖			巖
650	本			本
654	茲			茲
660	畝			畝畝畝
662	芸			藝執
669	勸			勸
672	陟			陟
685	勞			勞
688	勅			敕
693	鑑			鑒鑒

694	貌			貌
695	辨			弁辦辦 辯
702	其			丌
706	躬			躬
716	恥			耻
718	皐	皐	「皐」は智永本 など、「皐(エ キ・ヤク)」は別 字	皐
720	即			卽
721	兩			兩兩
725	解			解
728	逼			逼
730	居			尻
732	処			處
733	沈			沉
734	黙			默
744	遥			遙
745	欣			愀愀
747	累			縲
751	歡			歡
758	莽			莽
760	条			條
764	翠			翠
775	飄			飄
778	鷓			鷓
779	独			獨
782	摩			摩
785	耽			耽
786	読			讀
789	寓			寓
791	囊			囊
794	輜			輜
797	属			屬
800	牆			牆
802	膳			膳
803	餐			餐
808	腸			腸
820	旧			舊
824	糧			糧
835	円	員	通用字	圓
836	潔			潔
841	昼			晝
846	笋			筍筍
853	接			接

854	杯			盃
855	拳			拳拳
861	悦			悦
862	予			豫
868	続			續廣
872	嘗			嘗
876	拜			拜
878	懼			惧
881	牋			箋
887	審			宋
896	涼			凉
897	驢			駟
908	盜			盜
912	亡			亾
918	琴			琴瑟
922	筆			笔
924	紙			帀
929	釈			釋
933	並			竝儷
936	妙			妙
945	年			季
951	朗	晃	避諱	朕
960	照			曷曷
963	修			修
976	廟			庙
978	帶			帶
980	莊			莊
982	徊			徊

正誤表

タイトルに誤りがありましたので下記の通り訂正いたします。

(誤)	(正)
千字文の冒険険	千字文の冒険